Close-up

夏休み親子エコ教室を開催しました

あらかわエコセンターで、夏休み期間中、「夏休みエコ教室」・「夏休み親子エコ教室」を開催しました。この教室は、環境の大切さを楽しく学ぶことを目的として、毎年、夏休みの期間に開催しています。

8月7日に行われた夏休み親子エコ教室の「動物ダンボールガチャ工作」では、講師の藍川りの先生の指導を受けながら、親子でダンボールのカプセルトイを作りました。どんなカプセルトイを作るか話し合い、一緒にダンボールの組み立てや色ぬりなどをしました。

参加した人たちは、親子で協力して作ったオリジナルのダンボールガチャで楽しく遊ぶことができました。

[問合せ]環境課 ☎内線482

親子で楽しく作りました

世界に一つだけのオリジナルの作品が出来上がりました

モノづくり○×クイズの答え

A1 × 全部で区内31のスポットがエリアごとに掲載されています。体験できるスポットも多く、実際に見て触って楽しく学ぶことができます。

A2 × 細かく分けると約200もの工程があります。複数の職人さんが分担する場合が多く、一人の職人さんが全てを行うのは珍しいことです。

A3 ○ 牛や馬の革が使われることが多いのですが、中にはワニなどほかの動物の革を使うこともあります。見た目だけでなく、丈夫さや伸びのよさなどの違いを生かして使い分けます。

大人になったらどんな仕事をしてみたい？

「雑誌編集者」になるために

将来の夢インタビュー[第9回]

東京の街歩き雑誌『散歩の達人』の編集者・中島理菜さん。

いつごろから雑誌編集者になりたいと思っていましたか？

大学3年生の頃、就職活動で「何になりたいのだろう」と考えたとき、自分がたくさんの雑誌を持っていることに気付き、だんだんと雑誌編集者への憧れが強くなりました。

雑誌編集者になるために、何をしたらいいですか？

編集者に資格は必要ないのですが、いろいろな知識や教養、流行を基に「企画を立てる力」、たくさんの言葉や表現を知り、それを正しく活用させる「校正する力」などが必要だと思います。まずは多くの本や雑誌を読みましょう。

仕事内容を教えてください

簡単に言うならば、雑誌づくりの「司令塔」です。まずは企画を立て、記事を書くライターや、写真を撮るカメラマンと一緒に取材に行きます。その後、ラフと呼ばれる設計図を描き、デザイナーへ渡し、入稿します。そして出来上がった記事(ゲラ)が正しい日本語になっているか、確認をしてから印刷所に渡します。ほかにもアンケートの集計や読者プレゼントの発送など、実はマルチな仕事です。

どんなときにやりがいを感じますか？

読者の方から「この記事が良かったよ」と声を掛けていただいたときです。みなさんからのポジティブな声は励みになります。

雑誌編集者になりたい小・中学生にアドバイスをお願いします

雑誌を作るにあたり一番大事なことは「企画を立てること」です。読者の読みたくなる記事を作るために、まずは自分の“好きなこと”を貫いてください。「好きこそものの上手なれ」という言葉がありますが、好きなことこそ続けられ、しっかりと身につきやすいもの。その先に、自分にしかできないオリジナルの企画が生まれるはずです。

夢をかなえた人

中島理菜さん

愛知県出身。(株)交通新聞社入社後、2023年に月刊『散歩の達人』編集部へ配属。趣味は映画鑑賞で、誌面に映画の紹介枠を作った経験も。

応援message

何でも面白がろう!!

中島 理菜

ようこそ！吉村昭記念文学館 ～吉村昭と文学の魅力～ vol.1

[問合せ]吉村昭記念文学館 ☎(3891)4349

吉村昭ってどんな人？

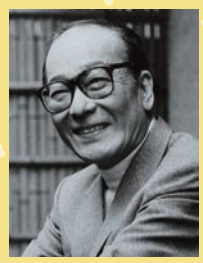
吉村昭(昭和2年(1927)～平成18年(2006))は、荒川区出身の小説家だよ。ゆいの森あらかわに吉村昭記念文学館があるのは知っているかな？吉村昭記念文学館では、吉村昭を通じて文学の魅力を発信しているんだ。このコラムでは、吉村昭のことや文学の面白さをさまざまな角度から紹介していくよ。

吉村昭は、昭和2年(1927)5月1日、現在の東日暮里六丁目で、製綿工場を営む父・吉村隆策と母・きよじの八男として生まれた。18歳まで家族と荒川区で過ごしたんだけど、その経験は吉村の人生に大きな影響を与えたんだよ。

吉村は中学生のときに肺結核にかかり、ろっ骨を5本も切除する大手術を受けたけれど、この病気や家族の死、戦争体験と戦後の急激な社会の変化は、吉村が小説家を志すきっかけとなったんだ。

吉村は大学生で小説を書き始め、その後、大学で出会った北原(津村)節子と結婚した。夫婦ともに小説家として多くの作品を発表していったよ。そして、芥川賞候補に四度もなったあと、昭和41年(1966)には『星への旅』で太宰治賞を受賞し、『戦艦武蔵』がベストセラーとなって有名になったよ。

そのあとも、戦史・歴史・医学・動物など幅広いテーマを扱い、詳しい取材を基にした作品を多く書き上げた。取材へ行くときは、お気に入りの万年筆と取材ノート、録音のためのカセットやカメラを準備して、全国の図書館や資料館を訪れ、たくさんの資料に目を通した。ある時は専門家にも取材して作品を書き上げていったんだ。



▲吉村昭氏

42歳のときに新築した家に引っ越し、その後、自宅の庭に書斎を建てた。この書斎は、吉村にとって創作の場であり、安らぎの場でもあったんだ。正月や小説の取材、全国での講演以外は、ほぼ毎日書斎の机に向かっていたよ。文学館にはこの書斎の再現コーナーがあるから、ぜひ、書斎の椅子に座って作家気分を味わってみてね。

※書斎再現コーナーは定期点検などのため、10月4日(金)まで利用ができません

リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
古紙パルプ配合率70%再生紙を使用